

## 書評 『大村はま国語教室』

(全15巻・別巻1), 筑摩書房, 1982~85.

戸 田 功

素晴らしい全集がここにある。著者は大村はま。昭和3年から昭和55年まで、52年間にわたる教職生活の後、その膨大な実践資料が整理・編成され昭和60年3月、『大村はま国語教室』(全15巻・別巻1)として集成したのである。氏の教育実践は一般には「単元学習」として知られ、その実践の素晴らしさは早くから注目を浴びていた。その実践の記録がまとまった形で公開された結果、国語教育界に一つの大きな流れが形成されようとしている。

『大村はま国語教室』は、大村はま生涯の教育実践の報告書ともいうべきものである。普通の全集の場合、講演や著述などを活字に直しただけのものであったり、一度発表したものをまとめただけのものが多い。けれども氏の場合そのようなものは少く、その主流である「学習の実際」は、保存してあった資料や記録を使って氏が書き下ろしたものである。<sup>1)</sup>自らの教育実践をふり返って、それを詳細にまとめあげることができたという事実は、いかに氏が教職という使命に自覚的に取り組んで来たかを証明している。

「やりきれない程沈滞している<sup>2)</sup>」日本の国語教育の現状を打開すべく、大村はまの協力者である倉沢栄吉氏は、『実践家の時代、出発進行<sup>3)</sup>』と題する文章の中で次のように言う。

波多野完治先生の評価——大村はまさんの実践とその集大成は世界に類例のないものである。——はその通りである。翻訳をして他の国々の母国語教育に有力な刺激を与えたいという願いを持つ人は多い。現に、中国には、大村はま先生の本をよみあさっている熱心な人がいる。

石森先生は、常々、大村教室の教室風景を丹念に映画にとっておくよう私どもに指示しておられる。全集のほかビデオができ、学習記録もまとまった形で復刻されている。これらを網羅して、しみじみと私は思う。今、国語教育は、大村はまを頂点とする「出発進行」のときであると。

事実『大村はま国語教室』は発刊後、多くの読者の支持を獲得しつつあるという。井上敏夫氏は、その実践事例が多くの人に活用されることを願い、次のように提案する。<sup>4)</sup>

まず、比較的实践しやすい領域・指導内容から、大村先生の示された方法の精神を理解したうえで、先生の示された方法をなぞってみる、それに類似した方法を探り上げてみるがよいであろう。現実の国語教育実践が、一般的には、国語教科書準拠を離れることができない以上、それと並行して、とりあえず、作文指導、ことばの指導、読書指導などの分野において、実践を試みるということがいちばんとりかかりやすいであろう。まず手始めに、このあたりから、大村先生の方法を跡づけてみる実践者たちの輩出するであろうことを心から期待したい。

では、大村はまの実践は、どういう点ですぐれているのか、氏自身の見解をもとに探ってみよう。

氏の実践の最大の特徴は、「目標が先にある<sup>5)</sup>」ということである。生徒一人一人が、人間として、より力強く生きて行けるための能力を高めて行くという目標が第一にあり、そこから、その能力を高めて行くには一人一人にどのような働きかけをしたら良いか、という模索が始まる。

一斉授業であっても、一人一人を見ているということなのです。「グループ指導」ということをいたしますね。「グループ」も、個人をよく生かすために編成するんであって、束にして教えるためではないのです。それをグループにすれば、束にしたような気持ちになってグループ活動をすることがありますが、結局、「教育」は個人の問題なんじゃないか、個人を生かすために個人にしたり集団にしたり、小さなグループにしたりいろいろな形がありますが<sup>6)</sup>、つまりは個人を伸ばすことが中心であると思います。

授業計画の作成に当たっても、同様に個人の能力を伸ばすことが第一に考えられる。

授業の計画を立てる時も、個人をだいじにしていない計画案は、それだけでダメな指導案ということにならないでしょうか。個人個人を伸ばさない、個人差に応じない、そういった案は、初めから落第案ということなので、立て直しではないでしょうか。<sup>7)</sup>

ここにみられる氏の厳しい態度は、氏自身の教職の専門性の自覚に由来していると言える。

その人のもっているもの、その人をとりまく広い世界、さまざまな人と出来事、それがその人を育てて行く。どのこと、どの人が、その人をどう変え、どう育てたか、それは、これと指すことはできないと思う。その人を育てた、多くのものの中に、育てることを専門の仕事とした、育てることを専門的に意識した人として教師はあると思う。<sup>8)</sup>

人間は無為自然に育つものではない。育つということは、外からの色々な働きかけを媒介として、自らを乗り越えて行くことだからである。<sup>9)</sup>その育つ過程に自覚的に参与し、生徒自身には気付かれることなく生徒を育てる、いわば「仏様の指」<sup>10)</sup>のような働きをするのが教師の使命である。けれどもそれは、教師自身が不断に自らを乗り越えていなければ果たすことのできない使命でもある。「育てることを専門的に意識した人」としての教師は、「生徒を育てる」という使命を媒介にして絶えず自らを乗り越えていなければならない。<sup>11)</sup>放っておけば怠惰に傾く人間というものの性に流されていながら、生徒に自らを乗り越える努力をさせることなど不可能なことだからである。<sup>12)</sup>

驚くべき深化と発展を遂げた<sup>13)</sup>大村はまの教育実践を根底から支えていたのは、「いつも生徒を見ていた」<sup>14)</sup>という、氏自身の教職の専門性の自覚であると言うことができよう。

生徒に必要な学習活動をそれと気付かせずにさせてしまう工夫、氏の「単元学習教材」はそのような工夫の結果生まれたものである。生徒のどの能力を高めることができるかという観点から導き出された生徒一人一人の学習活動に即して、また、それを指導する氏自身の能力に即して、<sup>15)</sup>教材が工夫される。そのような具体的な工夫が結晶したものとして、本全集に見られる様々な事例は存在していると考えられる。

以上のことから、氏の教育実践は、それ自体〈現象〉がすぐれている以前に、それらを貫く姿勢〈構造〉においてすぐれていると言うことができる。大村はまの場合、まず、一人一人の伸ばしたい能力があり、そこから各人に相応しい学習活動を導きだし、それに即して教材を工夫して作り上げ、働きかける。そこでは一貫して、生徒の伸ばしたい能力という目標が押さえられている。そこで成り立つ教育の過程にこそ、氏が携わってきた教職の本来の仕事があると言える。その本来の仕事に比べれば、本全集の集成といえども、氏の本来の業績である教育実践の、いわば影のようなものにすぎないのではないだろうか。

次に、『大村はま国語教室』に見いだされる氏が工夫した実践事例、そこから現場の教師は何を得ることができるだろうか。氏の見解通り、授業というものが一人一人の伸ばしたい能力に即して、また教師自身の実力に即して工夫して実践されなければならないとすれば、<sup>16)</sup>それらの事例は、現実の教育過程と離れてしまっている点において、また、大村はま本人との力量の差において、現場でその実践を跡づけることは実質的に不可能である。

それでは、なぜ大村はまは、氏本来の教育実践に比べれば無意味とも言えるこのような仕事をしたのだろうか。その実践事例が現場でそのままでは使うことのできないものであり、現場の切実な要求に答えられないものであるとするなら、この全集に何の意味があるのだろうか。

しかしながら、現場の教師が『大村はま国語教室』の実践事例（それは「現象」それ自体でさえないのだが）に切実に取り組んで行くうちに、おのずと高められ、身に付いて行くであろう大切な能力があることに私達は気付く。それは、大村はまの実践を根底から支えている教職の専門性の自覚〈構造〉である。とすると、実践家のための全集である本全集は、大村はまが、現場の教師のために、教職の専門性の自覚を身に付けさせるために作成した「単元学習教材」なのではないかと考えることもできるのである。

#### 〔注〕

- 1) 『大村はま国語教室』月報 16, 筑摩書房, 1985年3月, p. 1.
- 2) 『大村はま国語教室』月報 16, 筑摩書房, 1985年3月, p. 6.
- 3) 『大村はま国語教室』月報 16, 筑摩書房, 1985年3月, p. 6.
- 4) 『大村はま国語教室』月報 16, 筑摩書房, 1985年3月, p. 3.
- 5) 大村はま・倉沢栄吉「〈対談〉大村教室の『単元学習』について」『総合教育技術』10月号増刊, 1985年, p. 111.
- 6) 「教えるということ」『大村はま国語教室』第11巻, 筑摩書房, 1983年10月, p. 199.
- 7) 「単元学習と私」『大村はま国語教室』第1巻, 筑摩書房, 1982年11月, p. 341.
- 8) 大村はま「クラス会の話し合いから」『総合教育技術』10月号増刊, 1985年, p. 65.
- 9) 教育に内在する超越性について詳述してあるものとしては、佐藤臣彦氏（筑波大学体育科学系）の『体育概念の哲学基礎付け』（未公開）等がある。
- 10) 「教師の仕事」『大村はま国語教室』第一巻, 筑摩書房, 1982年11月, p. 245.

- 11) 「私の国語单元学習」『大村はま国語教室』第1巻, 筑摩書房, 1982年11月, p. 354.
- 12) 「教えるということ」『大村はま国語教室』第11巻, 筑摩書房, 1983年10月, p. 180.
- 13) 湊吉正「石川中時代の大村はま」『総合教育技術』10月号増刊, 1985年, p. 77.
- 14) 波多野完治・大村はま「<対談>大村はま=教師としての仕事」『総合教育技術』10月号増刊, 1985年, p. 26.
- 15) 「私の国語单元学習」『大村はま国語教室』第1巻, 筑摩書房, 1982年11月, p. 352.
- 16) 「国語教室の小さな知恵」『大村はま国語教室』第11巻, 筑摩書房, 1983年10月, p. 350.